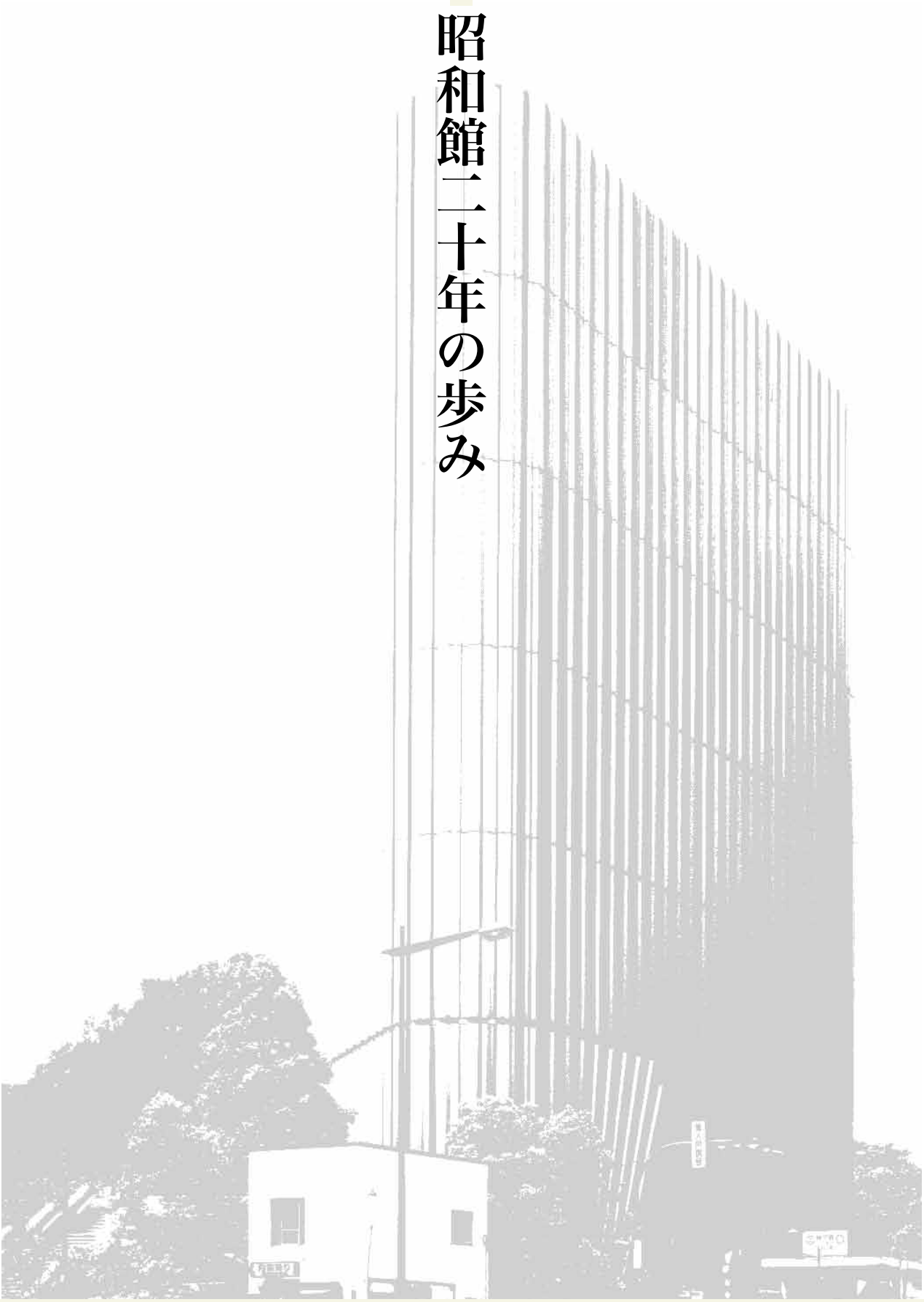
特集

昭和館二十年の歩み



特別企画展

「戦中・戦後のお菓子と子供」

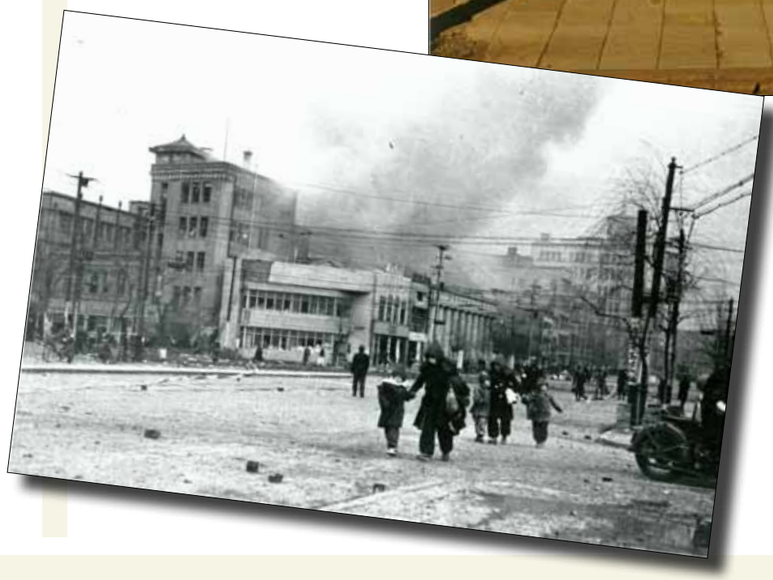
戦前の伝統的な和菓子から身近に食べ物があふれる現代まで、子どもたちの視点からお菓子の変遷を、時代背景とともに展示しました。なかでも戦争により甘いものが少なくなった中で工夫されたお菓子や、戦後を象徴するアメリカから流れ込んだチョコレートやチューイングガムなど、昭和10年代から昭和30年(1935～1955)頃を中心に、大人だけでなかった「戦中・戦後の労苦」を紹介しました。

特別企画展

「写真に見る戦中戦後のくらし」

右：東京の風景・日比谷
昭和24年(1949)　ディミトリー・ボリア撮影
マッカーサー記念館提供

下：空襲下の東京
昭和20年(1945)1月27日　石川光陽撮影

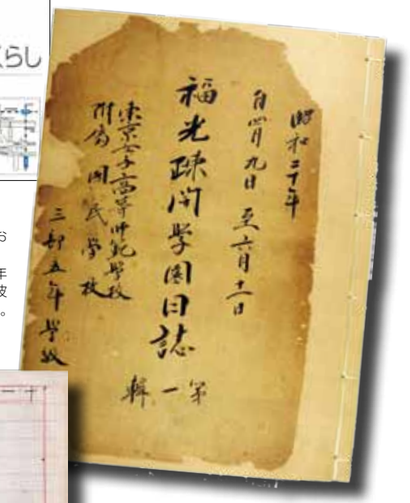


戦前から戦後にかけて撮影された記録写真により、当時の人々の生活や街並みを紹介しました。これらの写真資料は、アメリカ人によって撮影された貴重なカラー写真も含まれており、展示した全点を当館所蔵資料で構成しました。

企画展

「絵日記に見る戦中戦後のくらし―描かれし日々の思い―」

戦中・戦後の食糧事情やくらしの様子、そして学童学徒の疎開や勤労などに関連する当時の貴重な絵日記や絵日誌を、当館所蔵の実物資料とともに展示しました。日々のくらしを綴った絵日記を通して、生活上の様々な労苦を振り返っていただくとともに、当時の人々の「思い」を紹介しました。



福光疎開学園日誌　第一輯
東京女子高等師範学校附属国民学校(現・お茶の水女子大学附属小学校)5年生男子が、学童集団疎開先で記入したもの。昭和20年(1945)4月から翌年3月まで、富山県西砺波郡福光町(現・南砺市)で疎開生活を送った。名字の五十音順に輪番で記入した。
昭和20年(1945)4月9日から6月11日

絵日記
昭和19年(1944)11月5日

平成 6年(1994)
4月 1日　「戦没者追悼平和祈念館(仮称)」設立準備室を港区虎ノ門5丁目に開室

平成 8年(1996)
4月 1日　設立準備室を港区新橋3丁目に移転

平成10年(1998)
12月15日　施設名を「昭和館」とする
12月19日　設立準備室を千代田区九段南1丁目の「昭和館」内に移転

平成11年(1999)
3月25日　開館に先がけ、報道関係者に公開
3月27日　開館記念式典(於：九段会館ホール)

平成11年3月27日　開館記念式典

3月28日　一般公開
5月 1日～30日　特別企画展「戦中・戦後のお菓子と子供」
5月 3日～ 5日　「子供の日イベント」(しんこ細工・べっこう飴細工実演、紙芝居上演等)
8月 1日～22日　特別企画展「写真に見る戦中戦後のくらし」
8月 7日　講演会「ドキュメント戦後日本『歴史の瞬間』報道写真家の目：衝撃と戦慄の日々」
(写真家・浜口タカシ)
8月14日　講演会「昭和20年8月」(昭和史研究家・半藤一利)
8月21日　講演会「昭和の記録写真」(写真評論家・飯沢耕太郎)
11月 2日～23日　企画展「絵日記に見る戦中戦後のくらし―描かれし日々の思い―」

特別企画展

「戦中戦後のスポーツ－高校野球・夏の甲子園－」

甲子園球場の懸垂幕
昭和14年（1939）になると戦時色が強くなり、甲子園球場にも「国民精神総動員」等の懸垂幕が掲げられた。
朝日新聞社提供

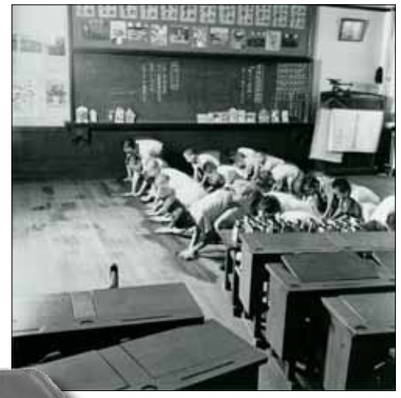
竿頭綬
優勝旗の先端から下げる飾帯。第5回大会（大正8年）の優勝校である兵庫県立第一神戸中学校をはじめ、第38回大会（昭和31年）優勝の平安高校までの帯が連なっている。
日本高等学校野球連盟蔵

大正4年（1915）に第1回全国中等学校優勝野球大会（現在の全国高等学校野球選手権大会）が開催されて以来、高校野球は国民に熱気と感動を与えるスポーツのひとつでした。しかし戦時下においては、戦局の深刻化に伴って昭和16年（1941）に大会が中止され、その再開は昭和21年（1946）のことでした。本展では、高校野球が始まった大正時代から戦中・戦後にいたる高校野球の歴史と変遷をたどりました。

特別企画展

「戦中戦後の子供のくらし－学校での生活－」

昭和16年（1941）、初等教育機関は尋常小学校と高等小学校から国民学校初等科（6年）と国民学校高等科（2年）に変わり、子どもたちは「少国民」と呼ばれるようになりました。物資が統制下におかれたこの時代には生活物資が不足し、子どもたちが使う学用品も例外ではなく、様々な素材を利用した代用品が使用されました。本展では実物資料や写真を通して、戦中・戦後の子どもたちのくらしを紹介しました。



教室清掃をする泰明国民学校の児童たち
昭和16年（1941）7月　藤本四八撮影
日本写真家協会（JPS）提供

筆入れ
軽くてさびないアルミ製の両開き筆箱が登場し、人気を集めた。
昭和23年(1948)頃

平成12年（2000）

2月10日～3月12日	特別企画展「戦中戦後のスポーツ－高校野球・夏の甲子園－」
2月11日	講演会「お米持参の甲子園」（野球評論家・佐々木信也） 「ベースボールと日本人」（ノンフィクション作家・佐山和夫）
4月 2日	来館者に対する説明員を新たに配置
4月 3日～ 4日	観桜茶会
5月 2日～29日	特別企画展「戦中戦後の子供のくらし－学校での生活－」
5月 3日～ 5日	「子供の日イベント」（代用食の蒸しパン試食、米つき・昭和の遊び体験、紙芝居上演等）

特別企画展

「戦中戦後を生きた人々－時代を記した写真展－」

授産所での作業
昭和22年（1947）11月　米国立公文書館提供

出征兵を見送る人々
昭和12年（1937）8月　土門拳撮影
日本写真家協会（JPS）提供

昭和20年（1945）まで続いた先の大戦は、人々の生活を大きく変え、社会全体にも様々な影響を及ぼしました。また戦後には経済が著しく混乱し、食糧不足もピークに達します。本展では、当時の国民生活を写した写真を通じて、日中戦争が起こった昭和10年代初期から、日本経済が再び活気を取り戻す昭和30年頃までの人々の暮らしを、社会・家庭・子供といった視点から振り返りました。

特別企画展

「手記と写真が語る母と子の戦中・戦後」

母子寮の歳末・江東橋母子寮
昭和21年（1946）12月
朝日新聞社提供

先の大戦において、夫や父を亡くした母と子の歩んだ道のりを、当時の家族の思いを伝える手記や写真を中心に、実物や映像資料によって紹介しました。

くけ台
埼玉県の木村房枝さんの母親が、昭和20年代から40年代頃まで使用していたもの。夫を戦争で亡くし、様々な内職仕事で生計を支えた。

6月10日	「昭和館土曜名画劇場」（毎月第2・第4土曜日、平成15年2月終了）　初回上映作品「そよかぜ」
7月25日～ 8月27日	特別企画展「戦中戦後を生きた人々－時代を記した写真展－」
7月30日	夏休み写真教室「カメラを持って集合！－上手な写真の写し方」（写真家・西村建子）
8月 6日	自作カメラ体験イベント「牛乳パックで逆さまスコープ!?－ピンホール・カメラを作ってみよう－」
8月20日	講演会「戦中戦後を写真家はどう表現したか」（写真評論家・岡井輝毅）
8月24日	『昭和館館報』第1号刊行(以後毎年度発刊)
11月21日～ 12月27日	特別企画展「手記と写真が語る母と子の戦中・戦後」
12月 2日	講演会「戦中・戦後の子供たち」（写真家・田沼武能）

特別企画展

「SPレコードでたどる戦中・戦後～流行歌と童謡を中心として～」

ラジオ東京の子供合唱団
米国立公文書館提供

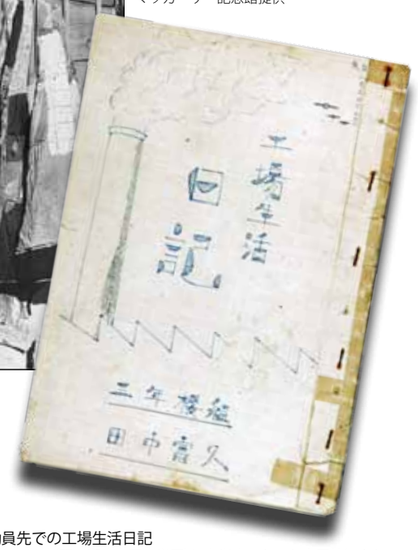
ポスター
銃後家庭強化の歌　のぼる朝日に照る月に
昭和14年(1939)発売

統制下の戦中では、歌手の活動や曲の発表も様々な影響を受け、物資の不足によりレコードの製造も制限されました。しかし、流行歌や童謡は人々にとって心の支えとなり、また戦後は復興の槌音とともに、多くの国民に勇気をあたえました。本展では、現在ではほとんど見かけることのなくなったＳＰレコードを中心に、写真や楽譜・パンフレットなどの資料により、戦中・戦後の流れをたどりました。

特別企画展

「苦難を越えて～戦中・戦後を生きぬいた子どもたち～」

子守りをする少年
昭和22～27年(1947～52)
ディミトリー・ボリア撮影
マッカーサー記念館提供



学徒動員先での工場生活日記
乃木高等女学校(現・湘南白百合学園)に在学中であった今岡扶紅さんが、横河電機製作所辻堂工場に学徒動員で通っていた時の日記。
昭和19年(1944)8月3日から9月5日まで記入。

戦中・戦後という厳しい時代を生きぬいてきた子どもたちのたくましさと、その苦難の多かったくらしを紹介しました。なかでも、先の大戦で父を亡くし、母とともに戦後の混乱した時代を生きぬいてきた戦没者遺児たちが経験した労苦の姿を、証言を交えて展示し、また著名人として財団法人日本相撲協会時津風理事長(当時・元豊山)を取り上げ、遺児としての苦難とその後の栄光を紹介しました。

特別企画展

「昭和の面影～職業絵尽を中心として～」

昭和職業絵尽　旗屋
画：和田三造
昭和15年(1940)5月

続昭和職業絵尽　靴みがき
画：和田三造
昭和29年(1954)12月

洋画家の和田三造が描いた「昭和職業絵尽」(昭和14～16年)や「続昭和職業絵尽」(昭和29～31年)をはじめ、小泉癸巳男画「配給物絵日記」(昭和19年)、長谷川春子ら女流美術家奉公隊25名の合作「大東亜戦皇国婦女皆働之図　春夏の部」(昭和19年)など約80点の版画やスケッチにより、戦中・戦後という時代の様々な職業に従事する人々とそのくらしぶりを振り返りました。

平成13年(2001)

2月14日～28日	常設陳列室陳列替え工事(3月1日リニューアルオープン)
4月 7日～ 8日	観桜茶会
5月 2日～28日	特別企画展 「SPレコードでたどる戦中・戦後～流行歌と童謡を中心として～」
5月 3日～ 5日	「子供の日イベント」(紙芝居上演、昭和の遊び体験等)
5月 6日	音楽会(講演と合唱)：元童謡歌手・平山美代子、大宮童謡唱歌の会(於：九段会館ホール)
7月25日～8月26日	特別企画展 「苦難を越えて～戦中・戦後を生きぬいた子どもたち～」
8月 5日、12日、19日	「昔の遊び体験」(トントン相撲・けん玉・樟脳船等) 夏休み工作教室「万華鏡を作ろう！」
8月 7日～13日	博物館実習生受入(以後毎夏実施)
9月 1日	「昭和館懐かしのニュースシアター」上映開始

平成13年9月1日　ニュースシアター上映開始
(写真は平成18年2月)

10月 7日～14日	第1回巡回特別企画展 「手記と写真が語る母と子の戦中・戦後」(大阪会場)
11月23日～12月24日	特別企画展「昭和の面影～職業絵尽を中心として～」

平成13年10月7日　巡回展(大阪)

特別企画展

「昭和の食の移り変わり～食卓を中心として～」

製麺器
上部の口にこねた生地を入れ、ハンドルを回し麺に加工する器具。米穀の代替で配給になった粉をうどんなどに加工して調理するのに重宝されたが、どこの家庭にもあったものではなかった。

戦中･戦後の厳しい状況のなかで、いちばんの関心事は毎日の食事に関することでした。本展では、時代によって「食」というものがどのように変わっていったのか、家庭の食卓を中心に食糧事情の移り変わりをたどり、その時代の状況を振り返りました。

サラリーマン家庭の夕食
昭和15年(1940)10月　藤本四八撮影
日本写真家協会(JPS)提供

特別企画展

「戦中・戦後を生きた女性たち～妻として母として～」

戦争は、多くの人々の生活に様々な影響を与えました。銃後の女性たちは、労働力として職場にかりだされることとなり、結婚や出産といった本来は個人的な問題であるはずの事柄も、戦争によって国策としての側面を持つようになりました。多くの夫婦が離ればなれの生活を余儀なくされ、戦争によってかけがえのない夫を奪われた女性もいました。本展は戦中･戦後の女性に焦点をあて、なかでも妻として、そして母としての生活を中心に、多感な時期を戦争のために犠牲となった若い女性を取り巻く状況を紹介しました。

妊産婦手帳
現在の「母子手帳」の前身として昭和17年(1942)から交付が開始された。妊娠時の診察を励行するとともに、必需物資及び食糧の特配を行おうとするもの。

子を背負う母親
昭和20年(1945)10月　米国立公文書館提供

平成14年(2002)

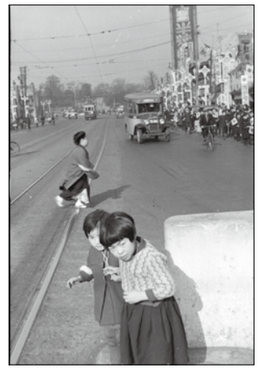
3月29日～30日	観桜茶会
4月27日～5月27日	特別企画展「昭和の食の移り変わり～食卓を中心として～」
5月 3日～ 5日	「子どもの日イベント」(すいとんの試食、竹馬・フラフープ・米つき体験、紙芝居実演等)
7月 1日	「昭和館見学作文コンクール」(以後毎年開催)
7月27日～8月31日	特別企画展「戦中・戦後を生きた女性たち～妻として母として～」
8月 4日､11日､18日	夏休み工作教室「回り灯籠を作ろう！」
9月12日	天皇皇后両陛下行幸啓
10月21日～30日	第2回巡回特別企画展「苦難を越えて～戦中・戦後を生きぬいた子どもたち～」(宮城会場)
12月 1日	紀要『昭和のくらし研究』第1号刊行(以後毎年度発刊)

平成14年12月1日　紀要『昭和のくらし研究』第1号

特別企画展

「桑原甲子雄　作品展『東京原景』」

右：下谷区上野公園山下(台東区上野四丁目)　昭和12年(1937)
下：下谷区三ノ輪町(台東区三ノ輪)　昭和13年(1938)



桑原甲子雄は、大正2年(1913)東京･下谷に生まれ、永きにわたり写真家として活躍する傍ら、戦後は『カメラ』『サンケイカメラ』(後に『カメラ芸術』に改称)などのカメラ写真誌の編集長を歴任しました。さらに氏の作品は、東京の下町を中心にそこでくらす人々の姿や街の様子、社会状況を氏独自の構図で丹念に捉え、その時代の国民生活を伝える貴重な資料となっています。本展では、昭和9年(1934)から14年にかけての作品約80点によって、千人針や出征風景など時代を象徴する様々な事象や暮らしの変化を紹介しました。

特別企画展

「家族と離れて～学童疎開・絵日記を中心として～」

絵日記
昭和20年(1945)3月

専用列車で出発する高田第五国民学校の児童
昭和19年(1944)8月　田中義元撮影
日本写真家協会(JPS)提供

本土空襲が予想されるようになった昭和19年(1944)、政府は都市部の国民学校初等科3年から6年までの学童を地方へ疎開させることを決定し、多くの子どもたちは見知らぬ土地で、両親と離れての生活を余儀なくされました。本展は学童疎開に焦点をあて、なかでも終戦までに40万人に達したという集団疎開をした子どもたちの生活はどのようなものであったか、その出発から帰郷までを絵日記を中心に紹介しました。

平成15年(2003)

3月15日～4月10日	特別企画展「桑原甲子雄　作品展『東京原景』」
6月 1日	学校向け広報誌『昭和館だより』第1号刊行(以後毎年度2回発刊)
6月11日～30日	常設展示室展示替え工事(7月1日リニューアルオープン) 「常設陳列室」を「常設展示室」と改称
7月12日	常設展示室「体験ひろば」にボランティア説明員を新たに配置(毎週土曜・日曜日)
8月 5日	新規情報検索システム運用開始
8月 9日～31日	特別企画展「家族と離れて～学童疎開・絵日記を中心として～」
8月17日	「語り部の会」(於：九段会館)
8月17日､24日	夏休み工作教室「万華鏡を作ろう！」
10月 1日	常設展示室に日本語版音声ガイド端末を導入
10月28日～22日	第3回巡回特別企画展「苦難を越えて～戦中・戦後を生きぬいた子どもたち～」(福岡会場)
12月 6日～14日	第4回巡回特別企画展「苦難を越えて～戦中・戦後を生きぬいた子どもたち～」(徳島会場)

特別企画展

「旅は世につれ～昭和旅紀行」

戦前には交通網も発達し、観光は産業として成長を遂げましたが、戦争の激化により軍事輸送が優先され、移動目的も疎開や買い出しなど切実なものに変化しました。戦後は、物資不足や施設の被災により交通事情は悪化し、そこに復員･引揚げなど大量の人員移動も加わり非常な混乱ぶりを示しました。しかし、復興とともに旅の情報提供・宿泊施設の整備され旅行ブームが起こるなど、旅の目的も多様化しました。本展では、戦前から戦中そして戦後の混乱から復興へと、時代とともに変化した旅を取り巻く状況を紹介しました。

ボストンバッグ
荒川区在住の鈴木家で使用。長男の徹さんが東京女子高等師範学校附属国民学校（現・お茶の水女子大学附属小学校）3年生の集団疎開時に、母親の登喜子さんが疎開先の北多摩郡東村山町（現・東村山市）の久米川郊外園に面会に行った際に使ったもの。

青年徒歩旅行　鍛錬の夏
昭和10年（1935）頃から、徒歩旅行であるハイキングが流行しはじめた。日中戦争勃発以降、旅行の目的は心身鍛錬にあるという意見が強まり、名前を「錬成旅行」などと変えて盛んに行われた。時代風潮として、今までの享楽的な旅行の概念が一変して、祖国を認識し心身を鍛練する「国策旅行」として、史跡や遺跡巡りが奨励されるようになった。
昭和13年（1938）

特別企画展

「平和への想い～戦没者遺族、慰霊の旅～」

戦後60年を迎えようとする現在、戦中･戦後の労苦を乗り越えてきた遺族の戦没者への想いは、未だ強いものがあります。この想いは帰ることのなかった夫、そして父や兄弟が亡くなった現地への慰霊の旅として実を結ぶこととなり、国や自治体、遺族会等により展開されています。本展では、戦後の生活状況や遺骨収集をはじめとした慰霊事業の様子、さらに慰霊友好親善事業として戦没者遺児が戦場となった現地の人々と交流している様子などを写真や手記を通じて紹介しました。

硫黄島での遺骨収集　海軍航空隊壕を手作業により試掘
昭和48年（1973）7月　厚生労働省社会・援護局外事室提供

日本丸、南海八島の遺骨収集に出発・竹芝桟橋
昭和28年（1953）1月　共同通信社提供

平成16年（2004）

2月25日～4月11日	特別企画展「旅は世につれ～昭和旅紀行」
3月 3日	総入場者数100万人超（累計）を記録
4月29日～5月 9日	写真展「石川光陽写真展　昭和を撮り続けたカメラマンの記録」
6月 8日	常設展示室に英語版音声ガイド端末を導入

写真展

「石川光陽写真展　昭和を撮り続けたカメラマンの記録」

カメラマンとして活躍する石川光陽
昭和13年（1938）頃

石川光陽は昭和2年（1927）に警視庁に入庁、以来昭和38年（1963）に退職するまでの36年間、持ち前の感性と写真館で鍛えた技術で昭和の時代を撮り続けました。警察官という特別な立場にいたこともあり、氏の写真には素晴らしい臨場感、迫力が兼ね備わっています。なかでも東京大空襲の様子については、記録資料として撮影を行った唯一のカメラマンとして、絶大な功績をあげたことで知られています。本展では戦前から戦中、そして戦後の混乱期へと移り変わる東京の風景や人々の写真を選び展示しました。

銀座通りで千人針
昭和12年（1937）8月頃
東京都京橋区(現・中央区)銀座通り

空襲下の東京(数寄屋橋付近)
昭和20年（1945）1月27日
麹町区（現・中央区）数寄屋橋付近

産業戦士体育祭
昭和16年（1941）9月頃
東京都新宿区明治神宮外苑競技場

6月12日～20日	第5回巡回特別企画展「苦難を越えて～戦中・戦後を生きぬいた子どもたち～」（滋賀会場）
8月 3日～29日	特別企画展「平和への想い～戦没者遺族、慰霊の旅～」
8月 8日	「語り部の会」（於：九段会館）
8月 8日、22日	夏休み工作教室「日光写真を写そう！」
9月30日～10月10日	第6回巡回特別企画展「苦難を越えて～戦中・戦後を生きぬいた子どもたち～」（新潟会場）

特別企画展

「戦中・戦後のマンガと子どもたち～胸ときめかせたヒーロー・ヒロイン～」

昭和の初めに少年雑誌ブームが起こり、子ども向けのマンガも数多く描かれましたが、戦争により様々な分野に統制がおよぶと、マンガや子どもたちを取り巻く状況も影響を受けるようになりました。また戦後復興の時期には、子どもたちに大きな楽しみを与え、いつの時代でも胸ときめかせるものでした。本展は、マンガと子どもたちを取り巻く状況を実物資料や写真により紹介しました。

上：マンガを読む子どもたち　昭和14年(1939)2月
沼野謙撮影　日本写真家協会(JPS)提供

右：コグマノコロスケ　吉本三平
昭和11年(1936)12月

特別企画展

「あの夏の記憶を永久に～60年前の日本の姿～」

先の大戦では戦地ばかりでなく、銃後においても激しい空襲を受けました。開戦前から政府は、空襲を想定して防空のための指令を下しましたが、都市や工場・軍事施設などへの空襲は、人々のくらしに多大な被害を及ぼしました。本展は、人々が経験した戦争の悲惨さ、虚しさを後世に伝えるべく、全国各地が焼け野原と化した空襲の実態を紹介しました。

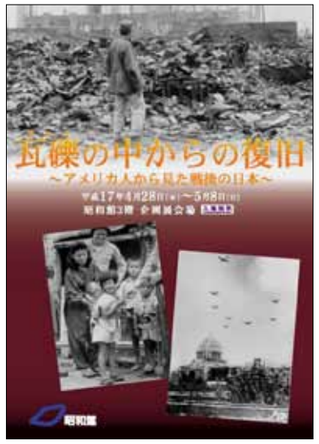
公園で群集を前に防空の必要性を説く愛国婦人会員
米国立公文書館提供

表示板
警戒・空襲警報が発令中であることを表示するもの。山口県宇部市で使用されたもので、上部のマークは「ウヘ」を上下に重ねて図案化した市章。敵機の侵入を知らせる警報は、この他にラジオや口頭、サイレンや警鐘によって伝えられ、段階に応じた退避等をすることが求められた。

写真展

「瓦礫の中からの復旧～アメリカ人から見た戦後の日本～」

日本は終戦とともに連合国の統治下におかれるとともに、進駐軍が各地に駐留するようになり、随行したカメラマンが戦後の日本を撮り続けました。この写真展では、廃墟となった街角から立ち上がり復旧を遂げつつある日本の姿を、戦争の傷跡が残る日本各地で戦災処理に励む人々の様子や子どもたちの生活や表情など、アメリカ人の目から見た光景として、未発表写真を含めて紹介しました。



上左：廃墟となった東京
昭和20年(1945)9月9日
東京都中央区銀座

上右：シベリアからの帰還者
昭和24年(1949)7月11日

下左：ボタン工場で働く孤児
昭和22年(1947)11月24日

下右：学校給食
昭和24年(1949)2月8日
宮城県仙台市原町小学校

※写真は全て米国立公文書館提供

平成17年(2005)

3月 1日	「昭和館見学作文コンクール」の最優秀作品に厚生労働大臣賞を授与
3月 5日～4月10日	特別企画展「戦中・戦後のマンガと子どもたち～胸ときめかせたヒーロー・ヒロイン～」
3月26日～27日、4月2日	イベント「紙芝居がやってくる！」
4月 3日	講演会「漫画史のなかの子供漫画」(漫画史研究家・清水勲　於：科学技術館)
4月28日～5月 8日	写真展「瓦礫の中からの復旧～アメリカ人から見た戦後の日本～」
5月 5日	子供の日イベント「ミニSLがやってくる！」
7月23日～8月28日	特別企画展「あの夏の記憶を永久に～60年前の日本の姿～」
8月 7日	「語り部の会」(於：九段会館)
8月20日	映画上映会「ガラスのうさぎ」(於：九段会館ホール)
8月21日	夏休み工作教室「万華鏡を作ろう！」
8月24日～26日	ハローワーク飯田橋からの依頼によりジュニア・インターシップ受入開始(以後毎年実施)
9月 3日～11日	第7回巡回特別企画展「永遠に伝えたい記憶～戦中・戦後の暮らし」(北海道会場)
10月 1日～31日	第8回巡回特別企画展「永遠に伝えたい記憶～戦中・戦後の暮らし」(岡山会場)

特別企画展

「ニュース映画にみる昭和」

ニュース映画は大正3年(1914)に登場し、昭和9年(1934)頃から朝日･読売･大阪毎日といった新聞社が製作しはじめ、さらに同盟通信社も加わり全盛期を迎えました。しかし、戦争の長期化に伴い「日本ニュース」に統合され、政府や軍の厳しい検閲を受けつつ国策として上映されることとなりました。終戦とともに、各新聞社や通信社による製作が復活し第2の全盛期を迎えましたが、昭和27年(1952)までGHQによる検閲は続きました。本展では、ニュース映画の歴史やその時代的な背景を紹介し、初公開を含む上映を通し当時の世相を振り返りました。

左：同盟写真ニュース 第1193号(2)
昭和15年(1940)8月頃
右：朝日映画ニュース
銅像になった忠犬ハチ公
昭和9年(1934)5月

特別企画展

「別れ、再会、そして･･･ ～時代に翻弄された家族の姿～」

丸山鎮さんの出征
昭和14年(1939)5月　丸山清公提供

ポスター　護れ興亜の兵の家
昭和15年(1940)　軍事保護院　画：川端龍子

戦中･戦後の激動の時代は、現在の「家族」にもいまだ少なからざる影響を及ぼしています。戦時中、多くの男性は兵士として戦地に赴き、そこには涙をこらえて見送る家族の姿がありました。さらに戦争末期には、都市部を中心に空襲を受け、離ればなれになる家族は少なくありませんでした。また、帰ることのなかった戦没者の遺家族は、つらい悲しみとともに戦後を迎えました。本展は、先の大戦において過酷な日々を過ごした家族の姿を通し、戦後も引き続く労苦を紹介しました。

特別企画展

「初公開　国立プロシア文化財団絵画アーカイブ所蔵
ベルント・ローゼ写真展『希望の光』～ドイツ人特派員が撮った昭和26年の日本～」

ベルント･ローゼ(1911-95)は昭和26年(1951)、戦後初めてのドイツ人カメラマンとして来日し、様々な風景と人々を写真に残しています。敗戦国という同じ立場にあったドイツ人の目に、当時の日本は、日本人はどのように写ったのでしょうか。敗戦後の日本を記録した写真は多く残されていますが、戦後処理のために駐留したアメリカを中心とした連合国や、一部の日本人による記録が主でした。本展ではドイツ人が見た、終戦より6年の月日が経ち、復興を遂げつつあった日本の姿を、ローゼが記した記事とともに紹介しました。

右上：広島
右下：佐藤家の食事風景

特別企画展

「手塚治虫の漫画の原点～戦争体験と描かれた戦争～」

戦後、日本の子どもたちを熱中させた漫画家・手塚治虫。昭和3年(1928)生まれの彼もまた、戦争体験者の一人でした。死と隣り合わせの日々のなかでも漫画への情熱を燃やし続け、終戦を知ったときは漫画を自由に描ける時代が来たと喜び、そして戦後は自ら体験した戦争や平和への想いを、様々な漫画に込めてきました。本展は、手塚治虫が生涯を通じて人々に伝えたかったメッセージとともに、戦中・戦後という日本人が最も苦労した時代を振り返りました。

上：来るべき世界 前編
手塚治虫　不二書房　昭和26年(1951)1月
下：大空魔王
手塚治虫　不二書房

特別企画展

「学生たちの戦中・戦後～忘れえぬ青春の記憶～」

画帳
精華高等女学校2年生が、学校工場へ派遣されてきた陸軍技術将校に贈った画帳。
昭和20年(1945)3月

ポスター　青少年雇入制限令
昭和15年(1940)になると、生産力拡充と徴兵により労働者不足が広がった。このため、重要産業への労働者確保を目的として同年2月「青少年雇入制限令」が公布された。これは年齢や条件を付すことで、一般青少年労働者の不急産業への雇入を規制するものであった。その後さらに労働力統制の強化が図られ、17年1月「労務調整令」の施行により「青少年雇入制限令」は廃止された。
昭和15年(1940)

昭和館ではこれまでも、小学校(国民学校)を中心とした特別企画展を開催していますが、今回はそれ以上の学年を扱ったものです。戦前の複雑な学校制度や、戦中の教育年限短縮、勤労動員や在学者徴兵猶予停止による学徒出陣、そして戦後混乱期の様子や新学制への移行など、激動の時代に学校制度はどのように変化し、学生・生徒たちはどのような学校生活を送ったのかを紹介しました。

平成19年(2007)

1月 5日～2月 4日　特別公開「硫黄島での遺骨収集」
3月14日～5月 6日　特別企画展「手塚治虫の漫画の原点～戦争体験と描かれた戦争～」
3月14日～4月30日　1階ロビーに映像・写真・図書資料を紹介する「資料公開コーナー」設置
第１回「東京大空襲」

平成19年3月14日　第1回資料公開コーナー
助からなかった赤い絆　画：堀切正二郎

3月21日　講演会「手塚治虫と戦争体験」(評論家・石子順)
4月 1日　貸出キット提供開始
「キッズナビ」(子ども用ホームページ)開設
4月28日～5月 4日「昭和の日」記念イベント：特別上映会「映像からみた昭和の顔」

5月 1日～6月15日　資料公開コーナー　第2回「戦中・戦後のこどもたち」
5月 3日～ 5日　GWスペシャル・子どもイベント「昔の遊びと紙芝居」
「鉄腕アトムがやってくる！」
6月16日～7月20日　資料公開コーナー　第3回「地上戦が終わった沖縄」
7月21日～8月31日　資料公開コーナー　第4回「夏の風物」
7月28日～9月 2日　特別企画展「学生たちの戦中・戦後～忘れえぬ青春の記憶～」
8月18日　「語り部の会」(於：九段会館)
8月19日　講演会「勤労動員・空襲・敗戦」(俳優・加藤武　於：九段会館)
9月 1日～10月19日　資料公開コーナー　第5回「カメラがとらえたビッグニュース」
9月29日～10月 8日　第11回巡回特別企画展「永遠に伝えたい記憶～戦中・戦後の暮らし～」(大分会場)
10月20日～12月 7日　資料公開コーナー　第6回「『少年倶楽部』『少女倶楽部』の表紙」
10月27日～11月 4日　第12回巡回特別企画展「永遠に伝えたい記憶～戦中・戦後の暮らし～」(広島会場)
11月23日～平成20年2月11日の土・日・祝祭日　特別上映会「敗戦と占領下の日本」「戦後の日本」
12月 8日～平成20年2月17日　資料公開コーナー　第7回「年末・年始の遊び・楽しみ」

平成19年8月19日　俳優・加藤武講演会
(協力：文学座)

特別企画展

「オリンピック　栄光とその影に～アムステルダム大会から東京大会まで～」

近代オリンピックは、第1回アテネ大会が明治29年（1896）に行われ、日本は明治45年（1912）の第5回ストックホルム大会から参加します。しかし、第11回のベルリン大会以降は戦争によって大会自体が中止になり、戦後の昭和23年（1948）第14回ロンドン大会では、敗戦国である日本の出場は許されませんでした。本展は、昭和に入って最初のオリンピックである第9回アムステルダム大会から、第18回東京大会までを通し、各時期におけるオリンピックの姿や日本とオリンピックの関わり、戦争とオリンピック、日本人メダリストの活躍やエピソードなどを紹介しました。

入場券（開会式）
開閉会式は人気が高かったため、抽せん会が行われた。約60倍の倍率に当選したものが入場券を入手できた。
これは開会式の入場券で特等が1枚8000円、5等が500円し、約6万3000枚が販売された。

特別企画展

「戦中・戦後をともにした動物たち」

先の大戦では、戦争の長期化に伴って身近な動物が軍用品や毛皮用、食用など資源として扱われ、農耕馬が軍馬に徴用されたり、飼い犬の献納運動が推進されました。さらに動物園では、空襲で逃亡した動物による被害を防ぐため猛獣処分が実施され、動物にとっても戦争は暗い影を投げかけました。一方、戦後の復興期には動物が明るい話題を提供し、人々の心を慰めてくれました。本展では、戦中･戦後を通して人間と動物の関わりを紹介しました。

ジョン倒れる
昭和18年（1943）8月17日
財団法人東京動物園協会提供

平成20年（2008）

2月23日～4月10日　特別企画展「オリンピック　栄光とその影に～アムステルダム大会から東京大会まで～」
4月15日～5月30日　資料公開コーナー　第8回「戦前の駅舎」
4月26日～5月11日　「昭和の日」記念イベント：写真展「SHOWAの原風景―石川光陽が撮った昭和の町並み・空襲・世相―」
4月26日～5月 2日　「昭和の日」記念イベント：特別上映会「続・映像から見た昭和の顔」
4月29日､5月 3日～5日
「昭和の日」記念イベント：
しんこ細工・あめ細工・風船パフォーマンス・紙芝居実演等
6月 1日　新規情報検索システム運用開始
6月10日～7月25日　資料公開コーナー　第9回「婦人雑誌の表紙」
7月 1日　第1回高校生ポスターコンクール（以後毎年開催）
7月26日～8月31日　特別企画展「戦中・戦後をともにした動物たち」

平成20年7月1日　第1回ポスターコンクール（募集ポスター）

「昭和の日」記念イベント写真展

「SHOWAの原風景―石川光陽が撮った昭和の町並み・空襲・世相―」

上：第１回普通選挙による投票所入り口
昭和3年（1928）2月頃

上：銀座和光付近での防空演習
昭和12年（1937）頃

左：シャッターを切る石川光陽
昭和20年（1945）頃
上下とも東京都

下：モダニズムの象徴・資生堂パーラー
昭和9年（1934）7月
上下とも東京都中央区銀座

石川光陽は昭和2年（1927）に入庁、以来昭和38年（1963）に退職するまでの36年間、警視庁のカメラマンとして活躍しました。戦中には、警視総監の命により空襲時や直後の被災状況を間近で撮っており、臨場感あふれるその写真は激動の昭和を振り返るのに欠かせないものとなっています。本展では、空襲の被災状況だけでなく、これまであまり取り上げられることがなかった、戦前から戦後にかけての東京の街並みや人々の生活、その時々に彼が直面した出来事や著名人との出会いなどにも目を向けました。

7月26日～9月5日　資料公開コーナー　第10回「東京オリンピック」
8月 2日　イベント「ミニSLがやってきた！　動物バルーン・アートの実演」
8月 3日　千代田図書館との連携イベント
「ミュージアムトーク for KIDS おじいちゃんが小学生だったころの動物園」（於：千代田区千代田図書館）
8月 9日　「語り部の会」
8月10日　講演会「ぞうれっしゃがやってきた」（作家・小出隆司）
8月17日　夏休み工作教室「バルーン・アートをつくろう！」
9月 6日～10月24日　資料公開コーナー　第11回「戦前～戦後の乗り物」
9月20日～28日　第13回巡回特別企画展「語り伝えたい戦中・戦後の暮らし」（宮崎会場）
10月18日～11月30日の土・日・祝祭日　特別上映会「ボリショイサーカスの人々」「地底の凱歌」「対馬丸～さよなら沖縄～」
10月25日～12月19日　資料公開コーナー　第12回「戦後の野球雑誌」
10月27日～11月 3日　第14回巡回特別企画展「語り伝えたい戦中・戦後の暮らし」（福井会場）
12月20日～平成21年1月31日　資料公開コーナー　第13回「『写真ニュース』にみる年末・年始」

開館10周年記念　特別企画展

「ワーナー・ビショフ写真展　『Japon』より～新しい日本と永遠なるもの　1951-52年～」

スイス出身のワーナー・ビショフ(1916-54)はマグナム会員の写真家で、ロバート・キャパとも親交があり、世界中で多くの写真を残しています。昭和26年(1951)7月に来日した彼は翌27年まで過ごしていますが、滞在中にも韓国や沖縄などにマグナムの戦争特派員として派遣されています。しかし、昭和28年より制作を始めた写真集『Japon』は、ペルーでの撮影中に没したため完成は没後となってしまいました。本展では、『Japon』に掲載された作品と未発表作品の中から60点を厳選し、戦後の混乱期を過ぎ新しい時代に向かおうとしている日本の姿を捉えた作品を紹介しました。

上：紙芝居を見る子どもたち　東京
昭和26年(1951)
下：通りを歩くミチコ　銀座
昭和26年(1951)

平成21年(2009)

2月 1日～3月20日　資料公開コーナー　第14回「東京の空襲～石川光陽撮影写真より～」
2月28日～3月19日　開館10周年記念　特別企画展
「ワーナー・ビショフ写真展『Japon』より～新しい日本と永遠なるもの　1951-52年～」
3月21日～4月19日　資料公開コーナー　第15回「東京の桜」
4月21日～5月31日　資料公開コーナー　第16回「子どもたちの遊びと生活」
4月25日～5月11日　開館10周年記念　「昭和の日」特別企画展「映像と写真・雑誌に見る戦前から戦後の日本」
6月 1日　DVD「昭和館10年のあゆみ」作成
6月 2日～7月24日　資料公開コーナー　第17回「戦中・戦後の市電と都電」
6月15日～30日　常設展示室展示替え工事(7月1日リニューアルオープン)
7月25日～8月30日　開館10周年記念　特別企画展「記された想い～手紙と日記にみる戦中・戦後～」

開館10周年記念　特別企画展

「記された想い～手紙と日記にみる戦中・戦後～」

荷札の手紙
小川義一さんが昭和12年(1937)8月16日、戦地へ出港する船上より妻の達子さんへ投げた荷札。2人は同年4月に結婚したが、8月に義一さんが臨時召集されまもなく戦地へ向かった。義一さんは翌13年8月に中国で戦死を遂げた。

戦時中、戦地にいる兵士とその家族が互いに近況を伝える唯一の手段は、手紙のやり取りでした。当時は検閲制度があったため、本心を書くことは難しい状況でしたが、手紙を丹念に見ていくと家族を思う気持ちばかりではなく、行間より当時の情勢なども読み取ることができます。また日記には、戦争の影響で変化していった日々の生活や、終戦後社会が復興していく様子が、そのときの想いとともに記されています。本展では、手紙や日記等の資料ほか、写真や当時を思い新たに書いた絵手紙をあわせて展示しました。

はがき
石川靖児さんに姉が送ったはがき。家族全員の寄せ書きになっている。
昭和19年(1944)8月22日

開館10周年記念　「昭和の日」特別企画展

「映像と写真・雑誌に見る戦前から戦後の日本」

少年少女雑誌

昭和館では開館以来、戦中・戦後の国民生活に関する映像・写真・図書雑誌資料を多数収集し、特別企画展や「昭和の日」前後の特別上映、資料公開コーナーなどで公開してきました。開館10周年記念として、近年新たに入手した戦前の子供ニュース映画と、戦中・戦後をテーマとした劇場映画(ビデオ)を上映し、これまで資料公開コーナーで展示した資料を改めて紹介しました。

2・26事件(警視庁中庭の反乱軍)
昭和11年(1936)2月27日
石川光陽撮影

7月25日～9月6日　資料公開コーナー　第18回「戦前～戦後のベストセラー」
8月 2日、9日　夏休み工作教室「絵手紙を描こう！」
8月22日　「語り部の会」
8月23日　講演会「シベリアに父を訪ねて」(女優・松島トモ子　於：九段会館)

平成21年8月23日　松島トモ子講演会

9月19日～27日　第15回巡回特別企画展「語り伝えたい戦中・戦後の暮らし」(青森会場)
9月19日～23日　開館10周年記念　「昭和の名作上映会」(「晩春」「二十四の瞳」)
10月 1日～11月15日　資料公開コーナー　第19回「ディミトリー・ボリアの総天然色の東京」
11月17日～12月27日　資料公開コーナー　第20回「流行病をやっつけろ」
11月21日～29日　第16回巡回特別企画展「語り伝えたい戦中・戦後の暮らし」(静岡会場)

終戦65周年記念特別企画展

「銃後の人々と、その戦後～出征遺家族の資料を中心として～」

出征により家族と離ればなれになった人々は、戦地と銃後に身を置きながらお互いを思い、祖国の勝利を信じて戦いました。そのような中にあって、不幸にも戦死した兵士の遺家族はもとより、出征した者のいる家族に対しても、国による援護のほか職場や学校、近所づきあいに至るまで様々な助け合いが行われていました。しかし、昭和20年(1945)8月15日、敗戦により国民の暮らしは一変します。なかでも頼るべき存在を失った戦没者遺族の生活は辛苦を極めました。本展では、戦中･戦後を生きた人々の証言とともに、当館が新たに収集した出征遺家族に関連する資料を多数展示しました。

税務署で泣く戦没者妻
昭和25年(1950)3月　毎日新聞社提供

東京ステーションギャラリーとの共催　於：旧新橋停車場鉄道歴史展示室

「石川光陽写真展　警視庁カメラマンが撮った昭和モダンの情景」

昼間の吉原遊郭　昭和10年(1935)
東京都台東区千束４丁目

上：高円寺カフェー街
昭和11年(1936)8月
東京都杉並区高円寺南3丁目

下：上野広小路の東京乗合自動車
昭和9年(1934)7月
東京都台東区上野広小路

昭和館所蔵の9,600点あまりの光陽作品のなかから、戦前を中心に生き生きとした昭和の情景をとらえた写真約80点を厳選し、《第1章　交通と乗り物》、《第2章　都市と下町》、《第3章　警察官として》の3章に分けて、同時代の実物資料とともに紹介しました。

特別企画展

「館蔵名品展　版画に描かれたくらしと風景」

国旗ハ輝く
画：小早川秋聲
昭和16年(1941)

東京回顧図絵　東京駅
画：恩地孝四郎
昭和20年(1945)12月20日

日本独自の木版技術は、明治になると西洋の印刷技法の流入により衰退の一途をたどります。しかし、すべての工程を自らの手で行うオリジナル版画(創作版画)と、彫摺分業という伝統版画の復活(新版画)を目指す作家により再興され、再び海外にも紹介されるようになりました。作品は風景画・美人画・役者絵など多岐にわたりますが、戦争が始まると昭和18年(1943)には日本版画奉公会が結成され、戦時色の強いものが制作されるようになりました。昭和館では、昭和を代表する川瀬巴水や恩地孝四郎らの版画を多数所蔵していますが、本展では厳選した作品により、昭和初期から戦後にかけての風景や人々の生活の様子を紹介しました。

平成22年(2010)

1月　5日～2月28日	資料公開コーナー　第21回「婦人雑誌の附録―ファッション編―」
1月　9日～2月28日	終戦65周年記念特別上映会「灼熱の炎のなかで―空襲と人びと」「敗戦と占領下の日本」
3月　2日～4月18日	資料公開コーナー　第22回「堀切正二郎さんが描く東京大空襲」
3月13日～5月　9日	特別企画展「館蔵名品展　版画に描かれたくらしと風景」
4月20日～5月30日	資料公開コーナー　第23回「村岡信明　淡彩と墨痕で描く東京大空襲」
4月29日～30日	「昭和の日」記念イベント(「昭和の遊び」、特別上映「ニュース映画にみる昭和20年」等)
6月　1日～7月19日	資料公開コーナー　第24回「終戦65周年特別企画・昭和20年刊行の雑誌」
6月27日	紙芝居定期上演会(以後毎月第4日曜日に開催)
7月21日～8月29日	資料公開コーナー　第25回「第2回高校生ポスターコンクール入賞作品展示」
7月31日～8月29日	終戦65周年記念特別企画展「銃後の人々と、その戦後～出征遺家族の資料を中心として～」
7月　8日	「戦中・戦後の体験を語り伝える会」
7月18日～19日	「子ども霞が関見学デー」出張展示(於：厚生労働省)
8月31日～10月　3日	資料公開コーナー　第26回「平和回復の調印式」
10月　5日～11月21日	資料公開コーナー　第27回「村岡信明が描いた東京大空襲の惨禍」
10月16日～24日	第17回巡回特別企画展「語り伝えたい戦中・戦後の暮らし」(三重会場)
10月30日～11月　7日	第18回巡回特別企画展「語り伝えたい戦中・戦後の暮らし」(山形会場)
11月23日～12月26日	資料公開コーナー　第28回「戦中と戦後を伝えた『新聞』」
12月　7日～平成23年7月18日	石川光陽写真展「警視庁カメラマンが撮った昭和モダンの情景」(東京ステーションギャラリーとの共催　於：旧新橋停車場鉄道歴史展示室)

平成22年6月27日　第1回紙芝居定期上演会

平成22年8月18日　子ども霞が関見学デー

平成22年12月7日　石川光陽写真展

特別企画展

「ポスターにみる戦中・戦後」

ポスター　札幌市営定期観光バス
昭和27年(1952)　札幌市交通局　デザイン：栗谷川健一
定期観光バスは大都市や観光地の見所をバスで巡るもので、札幌市では昭和26年から運行されていた。同乗して案内するのはこのポスターにも描かれた観光バスガイドで、女性の職業として憧れる者も多かった。

広告媒体としてのポスターは明治時代末に登場し、欧米の製版･印刷技術やデザインを取り入れながら発展しました。しかし、戦中には広告の対象となる多くの商品が、統制のため姿を消したことから商業広告は少なくなり、政策や情報伝達の手段として重視されました。昭和館では、戦中･戦後の世相を表す資料として多くのポスターを収集していますが、本展では第1期「公共事業･社会事業を中心として」、第2期「商業広告･文化催事を中心として」の2期に分け、昭和初期から戦中･戦後に描けての政策や広告などの内容や、デザインや紙質などの移り変わりを紹介しました。

特別企画展

「戦後復興までの道のり～配給制度と人々の暮らし～」

昭和12年(1937)、政府は戦争遂行のため「モノとカネ」に対し統制を行い、企業による自由な生産や価格設定は制限されました。さらに戦争の長期化に伴い、消費に対しても統制がおよび、配給切符や通帳を持たずに物品の購入はできなくなりました。戦後は配給の遅配や欠配が続き、非合法な買い出しや闇市で、法外な値段で必需品を入手するしかありませんでした。しかし、昭和22年から順次統制が撤廃され、その後日本は驚異的な復興を遂げたのです。本展では戦争による物資不足の中、人々はどのような工夫でやりくりしたか、また終戦直後の混乱期を生きぬき、いかに復興をなしえたかを紹介しました。

チラシ　餓死対策国民大会
終戦後も主食配給量は絶対的に不足し、さらに予定の配給量が遅れる「遅配」と、配給が取り消しになる「欠配」が続いた。食糧不足が一層深刻となり、多くの餓死者が出るとの危機感がもたれた。この大会は、昭和20年(1945)11月1日に東京・日比谷公園で開催されたもので、配給量の確保を政府等へ訴えた。
昭和20年(1945)11月

生徒制服
倉谷弘男さんが昭和18年(1943)に清水中学校に入学の際に購入したもの。着ているうちに痛んできた部分に、母親が継ぎをあてて着用した。

平成23年(2011)

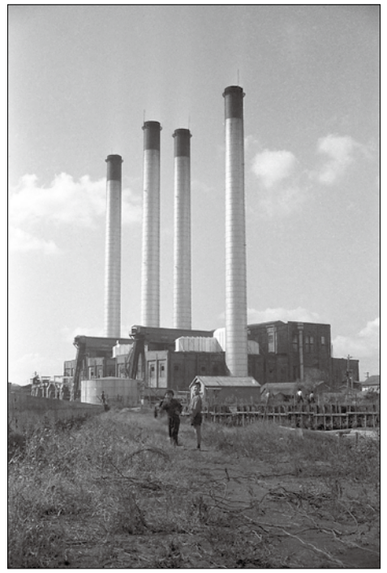
1月 5日～2月20日	資料公開コーナー	第29回「婦人雑誌の附録―料理編―」
2月22日～4月10日	資料公開コーナー	第30回「見て聴いて楽しいSPレコード」
3月11日	東日本大震災発生	建物および収蔵資料の一部に被害
		厚生労働省の要請で、帰宅困難者の一時受入施設となる
3月12日～18日	震災による館内整理のため臨時休館	
3月15日	ホームページ上に「ブログ」開設	
3月19日～4月21日	常設展示室の復旧工事実施	
3月19日～5月15日	特別企画展「ポスターに見る戦中・戦後」	

平成23年3月11日　東日本大震災

写真展

「写真にみる50年前の日本　よみがえる昭和の情景」

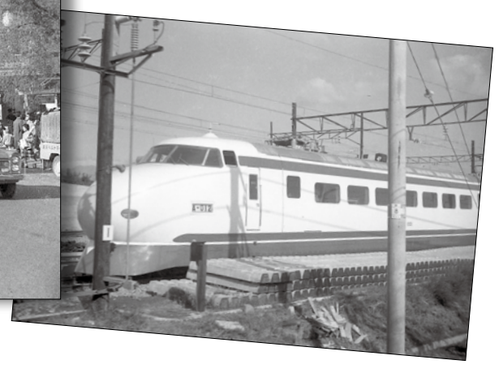
※写真は全て太田畯三撮影



今から50年前の昭和36年(1961)の日本は、戦後復興から高度経済成長へと大きく変貌していく時期でした。それは、昭和の古い光景と新しい時代の到来を思わせる二つの情景を見ることができる時代でした。本展では、こうした希望に満ちた50年前の「昭和」を写真により紹介しました。

上左：路面電車と本を読む少年
昭和37年(1962)5月
東京都千代田区神田小川町
上右：千住お化け煙突
昭和36年(1961)11月
東京都足立区千住桜木町

池袋駅東口周辺
昭和36年(1961)11月
東京都豊島区



新幹線試験車両
昭和37年(1962)11月
神奈川県

3月31日～4月 1日	「花見イベント」(大道芸・針金細工・紙芝居実演、昔の遊び等)	
4月19日～6月19日	資料公開コーナー	第31回「戦後の選挙」
4月23日～5月 6日	「昭和の日」記念イベント：特別上映会「ニュース映画にみる昭和21年の戦後『復興』と疎開児童」	
6月21日～8月 7日	資料公開コーナー	第32回「空襲による被災と復興」
7月23日～8月22日	特別企画展「戦後復興までの道のり～配給制度と人々の暮らし～」	
8月 7日	「戦中・戦後の体験を伝える会」	
8月 9日～9月 4日	資料公開コーナー	第33回「第3回高校生ポスターコンクール入賞作品展示」
9月 6日～10月30日	資料公開コーナー	第34回「終戦直後の地震・津波・台風被災」
10月 8日～16日	第19回巡回特別企画展「語り伝えたい戦中・戦後の暮らし」(愛媛会場)	
10月22日～30日	第20回巡回特別企画展「語り伝えたい戦中・戦後の暮らし」(山口会場)	
11月 1日～12月27日	資料公開コーナー	第35回「戦後復興のはじまり」
11月12日～平成24年1月22日	写真展「写真にみる50年前の日本　よみがえる昭和の情景」	

特別企画展

「昭和の紙芝居～戦中・戦後の娯楽と教育～」

昭和5年(1930)頃より、紙芝居を上演し飴などを売る街頭紙芝居が始まり、「黄金バット」や「少年タイガー」などの人気作品とともに全国に広がりました。一方、この流行は教育や宗教の布教にも導入されましたが、戦争の長期化に伴い戦意高揚を図る国策紙芝居が演じられました。戦中には姿を消していた街頭紙芝居は戦後いち早く復活し、テレビが普及するまで、戦前以上の人気を博すようになります。本展では、昭和館が所蔵する500巻以上の資料から、娯楽のみならず教育・国策にも利用された紙芝居について、その誕生から最盛期と衰退、さらに現在に至る新たな展開までを概観しました。

レコード紙芝居　紙芝居トーキー　防空は防火なり
作：伊藤松雄　画：高橋一雄
制作：興亜文化録音株式会社
昭和17年(1942)

紙芝居　神兵と母
作：宮下正美　脚色：馬々田鷹四　画：山川惣治
制作：大日本画劇株式会社
昭和19年(1944)

写真展

「絵はがきと写真に見る桜ー東京の桜の名所ー」

春といえば桜、桜といえばお花見。古来より桜を観賞することで、日本人は春の訪れを感じてきました。そして、絵はがきにはかつての見事な桜並木やお花見風景、桜を楽しむ人々の賑わいが色彩豊かに描かれています。本展では、九段界隈をはじめとする東京の桜の名所と花見を楽しむ人々の様子を、昭和館が収蔵する戦前に発行された絵はがきと写真を通して紹介しました。

（花の東京）飛鳥山の桜花
東京都

上野公園
昭和23年(1948)4月8日
東京都台東区
米国立公文書館提供

平成24年(2012)

1月 5日～3月 4日　資料公開コーナー　第36回「婦人雑誌の附録―女性のたしなみと生活―」
3月 6日～5月 6日　資料公開コーナー　第37回「大震災で被災したSPレコード」
3月17日～5月13日　特別企画展「昭和の紙芝居～戦中・戦後の娯楽と教育～」
3月17日～4月15日　写真展「絵はがきと写真に見る桜―東京の桜の名所―」
3月26日～29日　常設展示室の耐震工事実施
4月 6日～7日　「花見イベント」(紙芝居・大道芸実演、昔の遊び等)
4月28日～5月 5日　「昭和の日」記念イベント(昭和の遊び、特別上映会等)
5月 3日～5日　「昭和の遊び」イベント(紙芝居実演、水ヨーヨー釣り・メンコ・けん玉等)

特別企画展

「帰還への想い～銃後の願いと千人針～」

召集から出征までの、限られた時間の中で準備された千人針や日の丸寄せ書きには、家族や身近な人々の無事を祈る気持ちが込められていました。出征兵士は、会社や隣近所の人々が開いた壮行会で盛大な見送りを受け、銃後に残った人々は無事を祈って陰膳を据えたり、町内会では武運長久祈願なども行われました。しかし、戦争が激しくなるにつれて銃後の生活も変わらざるをえず、壮行会や街頭での千人針なども物資不足によって用意することも困難になっていきました。本展では、出征に関する実物資料や手記を通して、銃後の様々な祈りと人々の想いを紹介しました。

出征時の記念写真　石橋一男提供

家族から贈られた千人針
村野健二さんが陸軍に現役入営するにあたり家族から贈られたもの。村野さんの二人の弟が字と絵を描き、三人の姉妹は糸玉結びを頼んでまわった。裏には母と姉妹の名前が刺しゅうされている。
昭和19年(1944)

写真展

「東京オリンピック開催年の日本ー変わりゆく昭和の情景ー」

国立代々木競技場
昭和39年(1964)9月　東京都渋谷区

昭和39年(1964)10月に開催された第18回オリンピック東京大会は、アジア地域で開催された初めての大会であり、戦後急速に復興を遂げた日本が国際社会に復帰したことを世界に示しました。開催に向けて準備が進められる中、街の景観が様変わりしたところも多くありました。本展では、開催に向けて準備が進められる中、この年を中心に様変わりした日本の景観を紹介しました。

国立競技場「円盤投げ」像
昭和39年(1964)10月～昭和39年10月
東京都新宿区

※写真は全て太田睦三撮影

5月 8日～7月 8日　資料公開コーナー　第38回「65歳になった新憲法～日本の民主化ポスター～」
7月10日～8月 5日　資料公開コーナー　第39回「第4回高校生ポスターコンクール入賞作品展示」
7月28日～8月26日　特別企画展「帰還への想い～銃後の願いと千人針～」
8月 7日　「戦中・戦後の体験を伝える会」
8月 7日～10月 5日　資料公開コーナー　第40回「カラー写真で見る終戦直後の日本」
9月22日～30日　第21回巡回特別企画展「伝えたい『戦中・戦後』のくらし」(富山会場)
10月 6日～12月27日　資料公開コーナー　第41回「沸き立つオリンピックベルリン大会」
10月 6日～12月24日　写真展「東京オリンピック開催年の日本―変わりゆく昭和の情景―」(※会期延長)
11月10日～18日　第22回巡回特別企画展「伝えたい『戦中・戦後』のくらし」(京都会場)

特別企画展

「生誕100周年・没後30周年記念　中原淳一の生きた戦中・戦後～少女像にこめた夢と憧れ～」

中原淳一は、大正2年(1913)に生まれ昭和58年(1983)に没した、昭和を代表するファッションデザイナーです。雑誌『少女の友』の表紙絵や附録などを手がけ、一躍、人気画家となりました。戦中は慰問絵はがきを多く制作し、兵士たちの心を慰めましたが、その西洋的な画風が軍部からにらまれ、雑誌に掲載することができなくなっていきました。しかし、戦後はすぐに活動を再開、昭和21年(1946)8月に『ソレイユ』を自ら創刊し、物資不足の中でも豊かに生活する方法を提案し、女性たちに夢と希望を与え復興への原動力となりました。本展は生誕100周年と没後30周年を記念し、これまで紹介されることが少なかった戦中・戦後の活動を中心に業績を紹介しました。

ピクチャーレコード　浜辺の歌
盤面に淳一の絵画が刷られている。
歌：伊藤京子・カナリヤレコード

少女慰問しをり
戦地慰問品として販売されていた、淳一が描いた少女の顔のしおり。

写真展

「桜　さくら　サクラ」

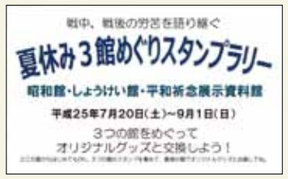
九段下周辺の桜も毎年見事な花を咲かせ、多くの人を楽しませてくれます。本展では、戦前から戦後の各地の桜やお花見をする人々の様子を、当館が収蔵する絵はがきや写真の中から紹介しました。

京阪天満橋駅
昭和25年(1950)3月頃
京都府
ディミトリー・ボリア撮影
マッカーサー記念館提供

上野公園博物館前桜花満開
東京都

平成25年(2013)

1月 5日～15日　常設展示室展示替え工事(16日リニューアルオープン)
1月 5日～3月 3日　資料公開コーナー　第42回「戦前から戦後の保育雑誌～85歳になった『キンダーブック』～」
3月 5日～5月21日　資料公開コーナー　第43回「子どもも楽しむSPレコード」
3月17日～5月13日　特別企画展「生誕100周年・没後30周年記念　中原淳一の生きた戦中・戦後～少女像にこめた夢と憧れ～」
3月20日～4月14日　写真展「桜　さくら　サクラ」
3月31日、4月 1日　初代花輪隆昭館長退任、羽毛田信吾館長就任
4月27日～5月 5日　「昭和の日」記念イベント(昭和の遊び、特別上映会等)
5月14日～7月 7日　資料公開コーナー　第44回「写真新聞ニュースにみる宇宙への夢」
7月 9日～9月 1日　資料公開コーナー
　第45回「第5回高校生ポスターコンクール入賞作品展示」
7月20日～9月 1日　「夏休み3館(昭和館・しょうけい館・平和祈念展示資料館)めぐり
　スタンプラリー(以後毎夏実施)



平成25年7月20日　3館スタンプラリー

特別企画展

「知ってるかな？戦中のくらし～子どもたちの一日～」

昭和16年(1941)4月、これまでの尋常小学校は国民学校に変わり、新しい教育制度となりました。翌17年の本土初空襲、同19年の学童疎開と、戦争は子どもたちにも大きな影響を与えましたが、終戦とともにくらしは一変します。本展では、当館が所蔵する日記を基に戦中のある一日を再現し、関連した実物や映像資料により学校や家庭での生活、終戦を迎えたときの思いなど、戦争に翻弄された子どもたちの姿を紹介しました。

絵
国民学校4年女児の作品。
学校で行われた防空演習の模様が描かれている。
昭和19年(1944)

学童服
小学生(国民学校生)は制服のない学校でも学童服で通学することが多かった。

写真展

「GHQカメラマンが見た戦後の日本ー復興にむけて働く人びとー」

※写真は全てディミトリー・ボリア撮影、マッカーサー記念館提供

上：米兵のライフマスクを製作する日本人
昭和22年(1947)～27年頃
東京都千代田区有楽町
左：街頭紙芝居を楽しむ子どもたち
昭和22(1947)～35年頃　東京都

ディミトリー・ボリア(1902-90)は、日本が戦後復興に踏み出した昭和22年(1947)に来日し、高度経済成長が始まる昭和36年に帰国しました。この間に撮影した写真はカラー作品を含む約30,000点(マッカーサー記念館蔵)といわれ、昭和館では約2,000点を保存しています。撮影対象は多岐にわたりますが、本展では戦後復興期に街頭や農漁村などで、今ではあまり見ることができなくなった働く人々を中心に紹介しました。

7月27日～9月 1日　特別企画展「知ってるかな？戦中のくらし～子どもたちの一日～」
8月 6日　博学連携事業「教員のための博物館体験」(以後毎夏実施)
8月11日　「戦中・戦後の体験を伝える会」
8月24日　アニメ上映会「対馬丸～さよなら沖縄」「チョッちゃん物語」
9月 3日～10月27日　資料公開コーナー
　第46回「昭和16年の大運動会(厚生体育大会)」
10月 2日～14日　第23回巡回特別企画展
　「伝えたい『戦中・戦後』のくらし」(熊本会場)

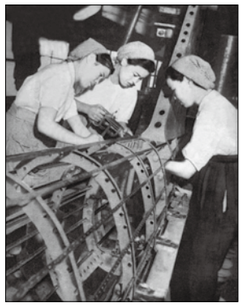
平成25年10月2日　巡回展(熊本会場)

10月29日～12月27日　資料公開コーナー　第47回「甦る　東京オリンピック」
11月 1日～12月23日　写真展「GHQカメラマンが見た戦後の日本ー復興にむけて働く人びとー」

特別企画展

「夢と希望と困難と～昭和の働く女性～」

大正末期から昭和初期にかけ、女性の就業者数は年とともに増加していきました。業種も拡大し、電話交換手やタイピストなど「職業婦人」が活躍します。しかし戦争が始まると、出征した男性に代わり女性が多様な職種を担わざるをえず、家事労働や農漁業、自営業においても国策による動員も加わって過重な負担となりました。戦後になっても働く女性の労苦は続きますが、地位向上に向けた動きが進むなか、次第に様々な分野で女性の社会進出が見られるようになります。本展では、戦中・戦後の家庭や社会で「働く女性」に焦点をあて、その時代を生きた女性の夢や希望、様々な困難を紹介しました。



飛行機工場で働く女子挺身隊員
昭和18年(1943)10月　毎日新聞社提供

鉢巻
熊本県立第一高等女学校(現・熊本県立第一高等学校)に在学していた山田英子さんが、学徒勤労動員でエンジン製造をしていたときに工場から支給されたもの。ボール盤や旋盤作業などに従事していたために、機械の油が付着している。
昭和20年(1945)

写真展

「さくら満開ー絵はがきと写真にみるー」

ポスター　JAPAN
昭和22年(1947)～昭和36年
ディミトリー・ボリア撮影
マッカーサー記念館提供

上：荒川堤五色の桜(花の東京)
下：赤坂見附の桜花満開
いずれも東京都

本展では、昭和館が所蔵する戦前の絵はがき、戦前から戦後にかけての写真や写真ニュースの中から、各地の桜と花見を楽しむ見物客の様子を紹介しました。

特別企画展

「空襲とくらし～そのとき、人びとは･･･～」

ポスター　疎開　空襲必至
都市疎開促進を呼びかけたポスター
昭和19年(1944)

政府は空襲による木造家屋への被害を予想し、昭和初年より損害を最小限にするため灯火管制や消防、防毒などの防空訓練を行い、昭和12年(1937)4月には「防空法」を公布して空襲に備えました。しかし、実際の空襲は多大な人的・物的被害となり、都市は廃墟と化しました。昭和20年(1945)8月の終戦により、人々は空襲に怯えることない日を取り戻しましたが、それは復興への長い道のりの始まりでした。本展では、空襲に備えた準備や工夫、疎開制度をはじめ想定以上だった実際の空襲被害などを紹介しました。

空襲で溶けた分銅
神田区(現・千代田区)岩本町の中山シウ子さんの和菓子店で、材料を量るために使っていたもの。自宅兼店舗は昭和20年(1945)2月25日の空襲で焼失し、その際の火災の高熱で溶けた分銅を焼け跡で発見した。中山さんは「二度と戦争が起こらないように…」との戒めに、ケースに入れて長年にわたり保管していた。

写真展

「昭和の東京をたずねる」

佃島の縁日
昭和40年(1965)8月
東京都中央区
持田晃撮影

右上：東京タワー(空撮)
昭和34年(1959)
石川光陽撮影
右下：東京都交通局モノレールと路面電車
昭和38年(1963)10月
東京都台東区
太田畯三撮影

空襲で大きな被害を受けた東京は、戦後めざましい復興を遂げ、昭和39年(1964)にはオリンピックを開催するにいたりました。近年、「昭和」の情景を絵画や版画で残す活動も行われていますが、本展では「昭和の東京」に焦点をあて、写真と絵画により昭和10年代から40年代の情景を紹介しました。

平成26年(2014)

1月 5日～3月 9日	資料公開コーナー　第48回「戦前～戦後の『お正月』と『雛まつり』」
1月26日～2月 3日	第24回巡回特別企画展「伝えたい『戦中・戦後』のくらし」(栃木会場)
3月11日～5月11日	資料公開コーナー　第49回「戦中・戦後の東京歌舞伎座」
3月15日～5月11日	特別企画展「夢と希望と困難と～昭和の働く女性～」
3月21日～4月13日	写真展「さくら満開－絵はがきと写真にみる－」(※会期延長)
3月30日	女性弁士による無声映画上映会「虚栄は地獄」「子宝騒動」
4月 5日～6日	「昭和体験イベント」(大道芸・飴細工実演、昔の遊び等)
4月26日～5月 9日	「昭和の日」記念イベント(特別上映会等)
5月13日～7月13日	資料公開コーナー　第50回「親もとをはなれて暮らす～学童疎開～」
5月25日～	紙芝居定期上演会を毎月から奇数月の第4日曜日に変更
7月15日～9月 7日	資料公開コーナー　第51回「焼けあとからたちあがる人びと」
7月26日～8月31日	特別企画展「空襲とくらし～そのとき、人びとは…～」
8月 2日、30日	「親子で学ぶ防空体験教室」
8月10日	「戦中・戦後の体験を伝える会」
9月 9日～11月 3日	資料公開コーナー　第52回「スチール写真にみる昭和シネマ」
10月 1日	新規情報検索システム運用開始
10月 1日～19日	第25回巡回特別企画展「伝えたい『戦中・戦後』のくらし」(佐賀会場)
10月11日～12月23日	写真展「昭和の東京をたずねる」
11月 5日～12月27日	資料公開コーナー　第53回「アメリカ人映像プロデューサーの見た日本～昭和10年～」
11月29日～12月 7日	第26回巡回特別企画展「伝えたい『戦中・戦後』のくらし」(石川会場)

特別企画展

「戦後70年　よみがえる日本の姿～オーストラリア戦争記念館所蔵写真展～」

首都キャンベラにあるオーストラリア戦争記念館では、英連邦占領軍として進駐したことから、日本国内の写真や映像を多く所蔵しています。外国人が撮影した、戦後の焼け跡や復興を遂げつつある姿を記録した映像は、その多くが日本全土を統治したアメリカ軍によるものでした。今回紹介した写真は、オーストラリア軍が広島・呉と東京という2都市を集中的に撮影したということや、英連邦軍基地内外での日本人と兵士と交流の様子が多く撮されているというのが最大の特徴といえます。

上：バラックの前に立つ女性
昭和20年（1945）9月頃
下：配給待ちの列に並ぶ人びと
昭和21年（1946）7月

写真展

「春らんまん」

春は卒業や入学に象徴されるように、別れと出会いの季節です。草木も芽生える春、作物の実る準備を始めます。田植えや茶摘みなど、人々の働く姿に季節を感じます。本展では、昭和館が所蔵する写真の中から、春を象徴するものを紹介しました。

九段のお堀で釣りをする
東京都千代田区
ディミトリー・ボリア撮影
マッカーサー記念館提供

上野公園の花見の迷子たち
東京都台東区
昭和9年（1934）4月
名取洋之助撮影
日本写真家協会（JPS）提供

小学生のピクニック
昭和23年（1948）
東京都
米国立公文書館提供

平成27年（2015）

1月 6日～3月 8日	資料公開コーナー　第54回「日本人とテニス」
3月10日～4月19日	資料公開コーナー　第55回「卒業と入学」
3月21日～5月10日	特別企画展「戦後70年　よみがえる日本の姿～オーストラリア戦争記念館所蔵写真展～」
3月21日～4月19日	写真展「春らんまん」
4月25日～12月20日	写真展「戦後70年写真展　知っていますか、70年前のこと」
4月29日	「昭和の日」記念イベント 「ハーモニカで綴る昭和歌謡史」（ハーモニカ奏者・斎藤寿孝）
4月 4日～5日	「昭和体験イベント」（大道芸・飴細工実演、昔の遊び等）
4月11日	講演会「日本人と英連邦兵士の交流について」 （広島国際大学・千田武志）
4月21日～6月28日	資料公開コーナー　第56回「終戦前後のSPレコード」
6月30日～8月30日	資料公開コーナー　第57回「北陸の人々と暮らし」
7月25日～8月30日	特別企画展 「昭和20年という年～空襲、終戦、そして復興へ～」
7月26日	皇太子同妃両殿下、愛子内親王御視察

平成27年7月26日　皇太子同妃両殿下、愛子内親王御視察

平成27年8月7日　秋篠宮同妃両殿下、佳子内親王、悠仁親王御視察

8月 7日	秋篠宮同妃両殿下、佳子内親王、悠仁親王御視察
8月14日～24日	戦後70年3館合同展示会「伝えたい　あの日、あの時の記憶」 （於：日比谷図書文化館）
8月22日	3館合同講演会（於：日比谷図書文化館） 皇太子同妃両殿下、愛子内親王御視察
9月 1日～11月 1日	資料公開コーナー　第58回「新収蔵資料 新しい時代のいぶき～井上裕章撮影カラー写真にみる～」
10月17日～27日	第27回巡回特別企画展「もっと知りたい！戦中・戦後のくらし」 （長野会場）
10月23日	3館合同講演会「伝えたい　あの日、あの時の記憶」 （於：ホクト文化ホール）
10月31日～11月 8日	第28回巡回特別企画展 「もっと知りたい！戦中・戦後のくらし」（和歌山会場）
11月 3日～平成28年1月24日	資料公開コーナー　第59回「子どもと読書」
11月 7日	3館合同講演会「伝えたい　あの日、あの時の記憶」 （於：和歌山県民文化館）

平成27年8月14日　3館合同展示会

写真展

「戦後70年写真展」

昭和20年(1945)は、戦中から戦後へと移り変わった年でした。この写真展では20年の1月から12月までを、第1期1～7月「空襲と人々の生活」、第2期8～9月「それぞれの終戦」、第3期10～12月「戦争の傷跡、新たな旅立ち」の3期に分けて紹介しました。

左上：女性の竹槍訓練
昭和20年(1945)7月3日
鹿児島県曽於郡志布志町
菊池俊吉撮影

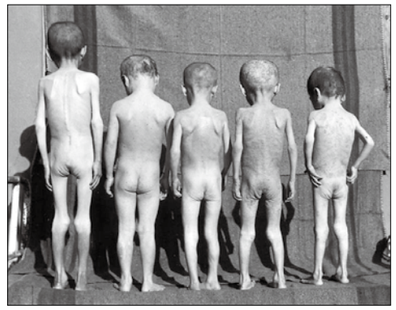
右上：新年の餅つき
昭和20年(1945)1月9日
東京都
米国立公文書館提供

左下：空襲を受けた銀座
昭和20年(1945)1月27日
東京都中央区
菊池俊吉撮影

左上：焼けた交番
昭和20年(1945)8月4日
東京都八王子市
石川光陽撮影

右上：墜落した飛行機
昭和20年(1945)9月9日
東京都
米国立公文書館提供

左下：終戦翌日に皇居前にひざまずく人々
昭和20年(1945)8月16日
東京都千代田区
石川光陽撮影



左上：ポスターを眺める米兵
昭和20年(1945)10月11日
北海道札幌市
米国立公文書館提供

右上：銀座三越前
昭和20年(1945)10月7日
東京都中央区
米国立公文書館提供

左下：栄養失調の子供
昭和20年(1945)11月1日
東京都板橋区
菊池俊吉撮影

左右：ゴミ箱に入れられ反省する青年
昭和20年(1945)12月15日
長崎県東彼杵郡
米国立公文書館提供

伝単
アメリカ軍の飛行機によって散布されたビラのこと。日本語で印刷され、戦意を喪失させるような内容が多く、多数の種類が存在する。これを拾ったものは内容を読まずに警察へ届けなければならなかった。

特別企画展

「昭和20年という年～空襲、終戦、そして復興へ～」

昭和20年(1945)初頭から、日本は各地で本格化した空襲により被害は拡大し、4月には米軍の沖縄本島上陸、8月6日に広島、9日には長崎に原子爆弾が投下されました。そして、8月15日の「玉音放送」により、国民は戦争が終わったことを知りました。終戦直後の国内は混乱を極め、人々は戦時中とは異なる労苦を経験しながら、復興への第一歩を踏み出していきました。本展では、激動の昭和20年を「空襲にさらされる日本(1月～8月)」「終戦8月15日」「混乱の中からの出発(9月～12月)」の3期に分け、人々の姿を実物資料の展示を中心に紹介しました。

作文　勅をはいし
東京都淀橋第四国民学校(現・新宿区立第四小学校)4年生であった島本京子さんが、集団疎開先の群馬県草津温泉で終戦の「玉音放送」を聞いた後に書いた作文。
昭和20年(1945)8月

戦後70年3館合同展示会　(於：日比谷図書文化館)

「伝えたい　あの日、あの時の記憶」

戦後から70年の節目の年を迎え、戦後生まれの世代が大多数を占める今、戦中･戦後の労苦について国民への理解を深め、戦争を知らない次の世代への継承を図るため、昭和館･しょうけい館･平和祈念展示資料館の国立施設3館が連携して、展示会を開催しました。

特別企画展

「双六でたどる戦中・戦後」

双六は、江戸時代に老若男女が正月に楽しむ遊びとして定着し、明治･大正時代には印刷技術の発達により、雑誌の附録として定番化しました。毎年発行される双六はその内容や絵柄に、当時の社会情勢や風俗･流行が取り入れられましたが、戦争が始まる頃から次第に兵隊などが描かれるようになり、やがて戦争一色の内容になっていきました。そして戦後には、世界の友好や科学の進歩などを紹介した平和的内容や、人気キャラクターを描いたものが主流となりました。本展では、テーマを「第1期：時局･教育･広告を中心に」「第2期：憧れ･流行り物を中心に」の2期に分け紹介しました。

北極たんけん双六
昭和24年(1949)1月1日発行　『小学四年』新年号附録
作・画：飯塚羚児　二葉書店　385×540㎜
少年少女向け雑誌の新年号の附録として発行された双六。正月の代表的な遊びとして福笑いや双六が行われていた頃には、各雑誌の附録として多くの双六が作られた。北極探検を題材としたものだが、実際の取材等に基づいたものではなく、作者のイメージによる内容のようだ。子どもたちはこのような双六から、知識を得て未知の世界への想像をふくらませるものであった。絵を担当した飯塚羚児は「少年倶楽部」などに帆船画や艦船画などの挿絵を発表し、数多くの冒険小説に掲載された。

愛国婦人双六
昭和9年(1934)5月5日発行　愛国婦人会
638×916㎜
愛国婦人会が発行した双六。同会は明治34年(1901)に創立され、戦没者遺族及び傷痍軍人救護やその他一般社会事業に貢献することを目的としていた。日露戦争をきっかけに発展し、大正8年(1919)末には会員数が100万人を超えた。この中で「軍事救護」をはじめとした会の活動を紹介しており、双六という遊びを通して組織の普及啓蒙を図ったものである。

写真展

「桜のおとずれ～花見を楽しむ～」

各地ではこれから、時期を違えて桜が開花していきます。地域によっては桜の表情も変わり、春の到来を楽しむ桜もあれば、雪景色とともに楽しむ桜もあります。この写真展では、各地の桜と花見をする人々の表情を紹介しました。

上：農村で子守りをする少女と父親
昭和22年(1947)～昭和36年
ディミトリー・ボリア撮影
マッカーサー記念館提供

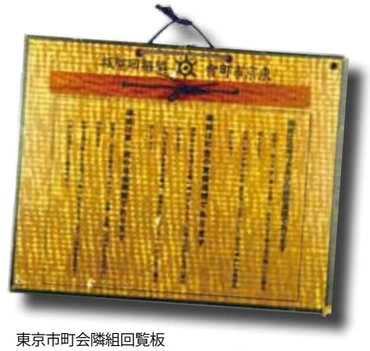
左：多摩川に花見にきた人たち
昭和25年(1950)4月
神奈川県川崎市
ラファイエット大学
スキルマン図書館提供

特別企画展

「“隣組”ってなんですか？～助けられたり助けたり」

昭和15年(1940)9月、内務省により町内会･部落会の整備拡充が図られるとともに、その下部組織として隣組(隣保班)が組織されました。隣組は行政の指示により配給切符の割り当てや防空活動、資源回収などの活動を行い、定期的に「常会」が開かれ組内の意思疎通の機会を設けるなど、戦時体制下での国民生活の基盤となる活動を行っていました。しかし一方では、組員同士の監視、思想の統制などといった、一人一人の生活を窮屈に感じさせる側面も持っていました。本展では、実物や映像・音響資料を通して、戦時下における様々な隣組の活動を紹介しました。

隣組の配給所
昭和16年(1941)8月
梅本忠男撮影・立命館大学国際平和ミュージアム提供



東京市町会隣組回覧板
回覧板を綴って各家庭に回すための板。
昭和14年(1939)～昭和18年(1943)頃

写真展

「ララ物資～太平洋を渡って差しのべられた救いの手～」

終戦により空襲に怯える毎日はなくなりましたが、戦中から引き継がれた配給制度は、物資不足から遅配や欠配が頻発しました。都市部では多くの餓死者が出て、残飯を漁り物乞いする孤児の姿が見られました。このような中、アメリカのアジア救援公認団体LARA(ララ　Licensed Agencies for Relief in Asia)から日本へ、「ララ物資」と呼ばれる食糧･衣類･医薬品･雑貨など大量の救援物資が届けられました。本展では、アメリカ･フレンズ奉仕団より入手したララ物資関連の写真を中心に紹介しました。

ミルクの樽をかついで喜ぶ男児たち
昭和23年(1948)頃
American Friends Service Committee提供

平成28年(2016)

1月26日～5月 8日　資料公開コーナー　第60回「九段界隈の移り変わり」
3月19日～5月 8日　特別企画展「双六でたどる戦中･戦後」
3月19日～4月17日　写真展「桜のおとずれ～花見を楽しむ～」
4月 2日～3日　「昭和体験イベント」(大道芸・チンドン屋・ポン菓子実演、昔の遊び等)
5月 1日　講演会「『双六』と世相」(双六研究家・山本正勝　於：九段生涯学習館)
5月10日～8月28日　資料公開コーナー　第61回「東京オリンピック」
7月 1日　第9回「ポスターコンクール」より応募対象を中学生・高校生とする
7月23日～9月 4日　特別企画展「“隣組”ってなんですか？～助けられたり助けたり～」
8月30日～11月13日　資料公開コーナー　第62回「初公開！　F・D・ルーズベルト大統領図書館所蔵写真」
9月17日～12月25日　写真展「ララ物資～太平洋を渡って差しのべられた救いの手～」
10月 1日　「語り部」育成事業第1期生研修開始(研修期間3ヶ年で、以後第2期生、第3期生募集)
Wi-Fi試験導入（開設は平成30年4月1日）
10月14日　「Twitter」「Facebook」「YouTube」の公式アカウント開設
10月23日～30日　第29回巡回特別企画展「もっと知りたい！戦中･戦後のくらし」(愛知会場)
11月15日～平成29年4月 2日
資料公開コーナー　第63回「母の思い、子どものあこがれ～戦後雑誌にみる子どものファッション～」
11月30日～12月 8日　第30回巡回特別企画展「もっと知りたい！戦中･戦後のくらし」(山梨会場)

特別企画展

「ポスターに描かれた昭和～髙橋春人の仕事～」

髙橋春人は、戦中・戦後に多くの公共ポスターを手がけた、黎明期の公共広報デザインの第一人者です。昭和39年(1964)の東京パラリンピックでは、企画委員・広報視覚媒体の制作を担当し、招致ポスター等も手がけました。当館には遺族からポスター等160点が寄贈されており、本展ではこのコレクションを中心に、写真や関連資料を併せて紹介し、戦中から40年代にいたる彼の足跡をたどりました。

上：ポスター　パラリンピック　東京1964
昭和39年(1964)

左：自作ポスターの前の髙橋春人
昭和15年(1940)　髙橋透提供
陸軍省が後援した「出征兵士を送る歌懸賞大募集」に際してのポスター前にて

写真展

「桜、誘われ」

昭和館が所蔵する写真資料の中から、桜に誘われて集う人びとの表情や風景を中心に紹介しました。また、会場では笠置シズ子の「さくらブギウギ」など、桜をテーマとしたSPレコードを流し、情緒を演出しました。

米兵に桜を差し出す少女
昭和21年(1946)4月20日　福岡県福岡市
米国立公文書館提供

松山城の桜と日赤の制服姿の女性たち
昭和18年(1943)4月2日　愛媛県松山市

平成29年(2017)

3月11日～5月 7日　特別企画展「ポスターに描かれた昭和～髙橋春人の仕事～」
3月18日～4月16日　写真展「桜、誘われ」
3月25日、4月 1日～2日、4月 8日～9日、5月 3日～5日
「昭和体験イベント」(大道芸・チンドン屋・ポン菓子実演、昔の遊び等)
4月 4日～6月25日　資料公開コーナー　第64回「第9回　中学生・高校生ポスターコンクール入賞作品展示」
4月29日　「昭和の日」記念イベント
6月27日～8月27日　資料公開コーナー　第65回「あの頃の都市と農村の暮らし～アマチュアカメラマンがとらえた人びと～」

特別企画展

「昭和を生き抜いた女性たち～大妻コタカと大橋鎭子らが生きた時代～」

大橋鎭子
出版社「衣装研究所」の設立を志す
昭和20年(1945)
暮しの手帖社提供

大妻コタカ
卒業生から贈られたルノーに乗るコタカ
昭和27年(1952)～　大妻学院提供

戦争は女性のくらしに大きな変化をもたらし、出征していく男性に代わって様々な役割を求められるようになりました。そして終戦をむかえると、苦しい耐久生活のなか新しい制度のもとで女性の権利や進学率の向上など、戦後復興を支える女性の活躍も目立つようになります。本展では、困難に耐え社会進出を果たした二人の女性、大妻コタカと大橋鎭子の生涯をたどり、昭和を生き抜いた女性たちの姿を紹介しました。

写真展

「カラー写真が伝える復興・発展のきざし―占領下の日本―」

ホテル・テート(帝都)
昭和25年(1950)　東京都千代田区丸の内

金物屋での記念撮影
昭和24年(1949)9月　群馬県高崎市

昭和23年(1948)7月に来日した連合国総司令部(GHQ)外交局の幹部将校ジェラルド・ワーナー(Gerald Warner)は、25年5月に勤務を終えたあとも1年あまり滞在し、各地を巡って街や人びとの様子をカメラに収めました。その写真は現在、ラファイエット大学スキルマン図書館が所蔵していますが、日本国内を撮影したものだけでも560点を超え、昭和館ではその内の約290点を複製し収蔵しています。本展では、42点を厳選して紹介しました。

7月22日～9月10日　特別企画展「昭和を生き抜いた女性たち～大妻コタカと大橋鎭子らが生きた時代～」
7月29日、8月19日　夏休み工作教室
7月26日　総入場者数500万人を達成
8月 6日　活動弁士による無声映画上映会「子宝騒動」「大学は出たけれど」「毬の行方」(活動弁士・ハルキ)
8月29日～平成30年1月 8日
資料公開コーナー　第66回「ハワイ大学ペニーノコレクション～子どもたちのいる風景～」
9月16日～12月17日　写真展「カラー写真が伝える復興・発展のきざし―占領下の日本―」
10月21日～31日　第32回巡回特別企画展「もっと知りたい！戦中・戦後のくらし」(鹿児島会場)
11月25日　紙芝居定期上演会(以降奇数月第4土曜日に変更)

特別企画展

「希望を追いかけて～フロリダ州立大学所蔵写真展～」

はく製のためのカモを持つオースティン
昭和22年（1947）頃

同潤会の青山アパート
東京都渋谷区神宮前

テアトル渋谷の入口
東京都渋谷区道玄坂
昭和23年（1948）

オリバー・L・オースティンjr.は、戦後間もない昭和21年（1946）9月から25年2月まで、GHQの天然資源局野生動物課長として日本に滞在した鳥類学者です。滞在中に撮影したカラースライドは1,000点にのぼりますが、鳥類学者としての記録ばかりでなく、全国各地の都市や農村に暮らす人々を写真に収めました。昭和館では750点を所蔵していますが、本展ではその内70点を厳選して紹介しました。

写真展

「女学生たちの青春～戦前から戦中、そして戦後へ～」

戦時下の女学生たちは、戦況悪化に伴い勉学の機会が奪われ、援農勤労奉仕や戦時救護の訓練、勤労動員の日々が続きました。校舎は転用されて軍需工場となり、厳しい監視下での作業に明け暮れることもありました。動員先では空襲によって多くの命が失われ、沖縄では看護要員として動員されたたくさんの女学生が亡くなっています。本展では、戦争に翻弄され銃後の担い手となった女学生たちの日常生活を紹介しました。

上：防毒マスクをつけて行進をする女学生たち　昭和11年（1936）6月27日
東京都中央区　堀野正雄撮影・米国立公文書館提供
右：「勤労報国隊」の腕章をした女学生たち　昭和20年（1945）3月頃　東京都

平成30年（2018）

1月10日～ 4月 1日	資料公開コーナー　第67回「詩と挿絵でたどる子どもの歌」
1月11日～ 26日	第33回巡回特別企画展「もっと知りたい！戦中・戦後のくらし」（高知会場）
3月10日～ 5月 6日	特別企画展「希望を追いかけて～フロリダ州立大学所蔵写真展～」
3月17日～ 5月 6日	写真展「女学生たちの青春～戦前から戦中、そして戦後へ～」
3月24日～ 25日、31日	「昭和体験イベント」（紙芝居・チンドン屋実演、昔の遊び等）